第2回 「きのさき見て歩き」を開催しました

実施日　　2020 年 12 月 2 日（水）　9：30～14：00　（天気：曇りのち晴れ）
講　師　　坂田　文一郎氏（城崎文化協会会長）、谷垣　和男氏（来日山登山実行委員会会長）

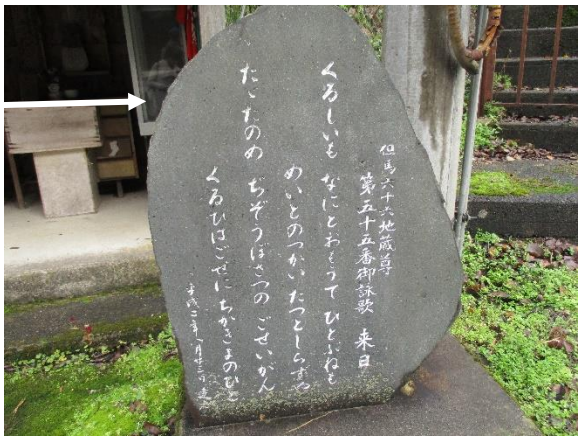
内　容　　来日（くるひ）　いにしえの故郷を訪ねて

＜但馬六十六地蔵尊（たじまろくじゅうろくじぞうそん）＞

　但馬の各地にお地蔵さまが置かれています。香住の一日市を一番とし、出石奥山の六十六番まで、175 ㎞に及びます。来日のお地蔵さまは五十五番です。

　誰かが、いつの間にか、額に書かれ古く読めなくなってしまった御詠歌を、石碑にしてくれました。

　馬山の言い伝えや、鬼七兵衛の話、アメノヒボコの話など、来日には興味深いお話がたくさんあります。



＜式内久流比神社（しきないくるひじんじゃ）＞

　鹿対策のフェンスを開けて、いざ、階段１３９段！本殿のハリには、竜神様が彫られ、祀られていました。闇御津羽神（くらみつはのかみ）という竜神様は、イザナギ・イザナミの子ども火之迦具土神（かぐつちのみこと）の血から誕生した神さまです。昔々の神話の世界のお話が身近にあるなんて、来日ってすごい！

　狂いの土蜘蛛という賊を征伐した神・来日足尼命（くるひそこねのみこと）も祀られています。来日の地名はこの神さまが由来という説があります。

　10 月のお祭りでは、神輿が町内を練り歩きます。その際の準備で、道路にはみ出している人家の庭木は切り捨て御免！だったそうです。

＜高峰山観音寺（こうほうざんかんのんじ）＞

水害により荒れ気味だったお寺を、現在の吉田住職が仏像・仏具を増やし、四季折々の植物を植え、綺麗に手入れをしてくださっています。庭の石碑「繫徳維昭（けいとくきしょう）」には、来日青年会が、八十八の石像を置いた経緯・由来が書かれています。曹洞宗でたいへん有名な高僧が３人も石碑に協力しており、住職も驚いたそうです。

＜高峰山雲光寺（たかみねさんうんこうじ）＞

本堂の中には、高僧・恵心僧都源心作の結跏趺坐姿の薬師如来像があります。国宝級の文化財と伝えられています。源心は、母の「まことの求道者となりたまえ」という教えの通り、たいへん立派な方で、七高僧の一人として讃えられています。

600 年前の火事で、お寺は焼失しましたが、盤珪国師や京極高住らが再建に力を注ぎました。台風により再興は途絶えてしまいましたが、再建のお祝いの踊りが、今も「ヤーチャー踊り」として受け継がれています。

＜八畳岩（はちじょういわ）＞

名前の由来は、畳八畳分の大きさだから。別名の加持懸岩の由来は、「昔、神さまが加持をかけたから」とも、「昔、このあたりが海底だったころ、通る舟の梶が引っ掛かったから梶掛岩という」とも言われています。大きな岩で、転ばないよう、おそるおそる登りました。

＜来日岳頂上（くるひだけちょうじょう）＞

あったかいお味噌汁で温まりながら、絶景を満喫しました。円山川や竹野の海がよく見えました。秋には来日岳自慢の力強い雲海が見られます。雲海が出る条件は、①放射冷却現象があること②空気中の水分が多いこと③風がないこと④当日の最高気温と最低気温の温度差が大きいこと　この４つが満たされると、綺麗な雲海が見られます。

来日岳では、春、虫取り網を持った登山者が増えます。蝶の南限と北限の中間地点に位置し、種類が豊富だからです。野鳥も多く、それを撮るためカメラを持った登山者もいます。来日岳は、多くの人に愛されています。

「巡礼の道」八十八地蔵の一部。講師・谷垣さん家のお地蔵さまもあります。

昭和 40 年頃に、テレビ塔が建てられ道路が整備され、頂上まで車で登ることができます。ロープウェーに乗らなくても、天橋立まで行かなくても、素晴らしい景色はこんな身近にありました。花々を手入れしている観音寺、雲光寺の立派なしだれ桜。４月になったら見に来たいと思います。

城崎という小さなまちの中の、さらに小さな来日地区。その中で、古事記や日本書紀など、はるか昔に遡って歴史があるって、なんてすごいことでしょう。講師の谷垣さんからは、すごく来日愛を感じました。来日岳を、来日を、住民全員で大事にしていることが伝わってきました。これからも、この歴史の物語を語り継いでほしいと願います。図書館も、地域の施設として、保存・広報の一役を担っていかなければと思います。

城崎分館に来日に関する資料があります。
どうぞ、ご利用ください

『内川村誌』K22/216/ウチ
『きのさきの話』K22/291/キノ
『来日岳』K22/291/ニシ
『きのさき語りぐさ』K22/388/キノ